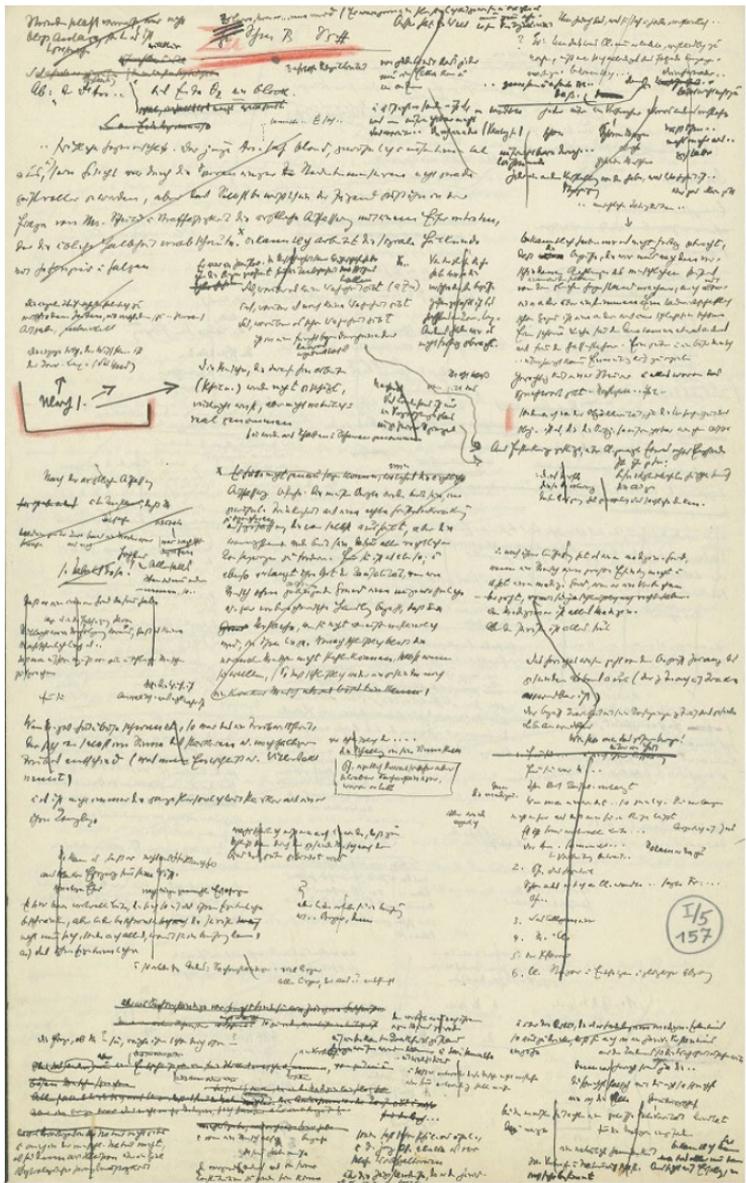


9. 「まるでぼくはもう存在していないかのようです」

ンスなこの考えを、ムージルは、一九四二年、つまり死の数カ月前、ジャン・パウルの遺稿を編纂していたドイツ文学者エードウアルト・ベーレントと会ったあとに記している。ムージルには、彼のような作家が後世の人びとにどんな課題をつきつけることになるのか、なんとなくわかっていたのでろう。ウィーンのアズモフスキー街二〇番の住まいに残し、戦争によって一九四五年に失われた、量も不明な草稿は別として、この「紙の国の王」（ヘルマン・ブロッホ）は、数多くのファイルと日記のノートをどこに行くにも携えていた。一九三二年にはウィーンからベルリンへ、その二年後にはベルリンからふたたびウィーンへ、そしてそこから亡命先、つまりまずチュリヒ、それからジュネーブへ。それらは、作家が執筆の苦行に生涯耐えたことを証明するための私的資料集などではなかった。きわめて現代的な「焼き窯」（H33/83, T1945）、思考と執筆の工場であった。

この迷宮——構想や破棄されたアイディア、準備段階のメモや行きづまった文章、観察や省察からなり、六〇のファイル、四〇冊のノートに展開され、総計で一万一〇〇〇ページを超える——は、たしかに数十年かけて成立したものだ、ムージルの手でそのつど再構成された。作家は、彼の小説装置を覆うように相互参照システムをほどこし、着想稿や「試作稿」、章構成代替案のスケッチ、一面に修正が書きこまれた清書稿、さまざまな表現のヴァリエーションや自己注釈や素材をまとめたメモなど、あらゆるもののあいだを縦横無尽に動けるようにしていた。II Rr. 5, Brg. 2, S21 だとか SchMb Tge 8 S 6 とついた暗号めいた参照記号が、約一〇万箇所にわたり、世紀転換期のメモからスイス亡命期の仕事までありとあらゆるものを結びつけている。それは、前インターネット時代の精妙なハイパーリンク・システムであり、そのなかで、いわば文書どうしがコミュニケーションを交わし

最後の作品：遺稿



【写真 47】

《特性のない男》の《クラリセ》群のための《試作稿》、1933年なかばから1934年3月にかけて

9. 「まるでぼくはもう存在していないかのようです」

ている。

この「特異な作品 Werk sui generis」¹⁰⁸の探究はすでに数十年つづいている。未亡人マルタ・ムージルによって一九四三年には編集刊行された続巻も、アードルフ・フリゼーによる二度の作品集（一九五二年および一九七六〜八一年）も、ともに編者による抜粋に過ぎず、本というメディアの限界に直面している。¹⁰⁹結局のところ、この遺稿はデジタルでしか伝えられないだろうし、なにより作家自身がコンピュータを必要としていたのだ、というのが、ムージル研究における長年の決まり文句だった。DVDで刊行されたあらたな『クラীগエンフルト版全集』（初版二〇〇九年、アップデート版二〇一二年）により、ムージルがうみだした読む迷宮を、

画面上で探索することが可能になった。当然このエディションの眼目はハイパーリンク性にあり、作家自身の手で刊行された作品、外典的な遺稿やコメントなどが結びつけられる。つまりムージルの宇宙を自由自在にサーフィンすることが可能になる——そしてついには作品世界の境界を超え、より広いコンテクスト、たとえば、この学者詩人^{ポエト・クリストフス}が哲学や心理学から作中に取りこんだものにまで到達できる。

一九三二年以降「ほつれていった」¹¹⁰小説の筋が、編者たちの手によってみごとに復元された結果、物語の個々の系は、はじめて明瞭に読み分けられるようになった。保存されている限りでの前段階プロジェクトについても同様である。その結果、一

108 Walter Fanta: Das Finale des «Mann ohne Eigenschaft». In: Ebd., S. 585

109 Vgl. Walter Fanta: «Man kann sich das nicht vornehmen». Adolf Frisé in der Rolle des Herausgebers Robert Musils. In Roland S. Kamezaki/ Rüdiger Nutt-Kofoth/ Bodo Plachta : Neugermanistische Editoren im Wissenschaftskontext. Berlin 2011, S. 251 - 286

110 Vgl. Fanta, Anm. 86, S. 586f.

九二〇年代に書かれた「初期稿」に属する「スパイ」や「双子の妹」も、独立した小さな作品ととらえられるようになった。だがこのエディシヨンの狙いはもつと先にある。クラーゲンフルト版は、計画されながらついに書き上げられなかった最終章の母質クズとして、ムーヅルが下書き帳に謎めいた暗号で書いていたものも、読解可能にした。「最後の愛の物語」がどのような終わりを迎えるのか、ウルリヒとアガートルはついに最後の一線を越えるのか、それともあくまで愛について語りつづけるのか、その解答のいくつかの可能性がここについて示されている。それともこれらも結局のところ、さらなる「解決案、諸関係、布置」コンストラクティブ（P.1029）に過ぎないのだろうか。



【写真 48】
ジュネーブのローベルト・ムーヅル、1941年3月